

情報科教育法 b No.2

2019/10/4 & 10/9

[1] アクティブラーニング

- アクティブラーニングとは「主体的、能動的な学び」という意味
- 近年では、ICT教育が重要なポイントである
- アクティブラーニングでは、板書などをすることがない 実習・演習形式が多い
- 教科情報では、実習・演習も交える必要性

[2] BOYD (Bring Your Own Device)

- 生徒が個人の端末を学校に持ち込み、学習に活用するのが BYOD(Bring Your Own Device)
 - メリットやデメリットが存在する

[3] ティーム・ティーチング (TT)

- 特別支援学校では、ほとんどの授業がTTで行われており、欠かすことのできない
- TTは、1950年代にアメリカで始まった教育形態で、1960年代に日本に紹介され。日本の障害児教育では、養護学校教育義務制に向けた複数担任制と、その後の教員定数の改善の流れの中で、障害の重度化・多様化に対応する方策として全面的に取り入れられ、一般的な教育形態として定着
- TTの定義は、「2人以上の教員がチームを組み、児童生徒の教育に責任を持って当たる協力型の授業組織である (Shaplin,1964)」が一般的です。「協力教授」「協力教授組織」などと訳されている
- TTは、「複数の教師がチームとなり、各教師の特性を生かしながら、一つの子ども集団を対象に、指導の全部または一部について共同で責任を負い、協力して指導に当たること」

1. 単集団 (全体支援) 型
2. 単集団 (個別支援) 型
3. 単集団 (小グループ支援) 型
4. 複数集団 (グループ巡回支援) 型
5. 複数集団 (グループ分担支援) 型
6. 複数集団 (合同学習支援) 型

- TTを機能させるためには、授業づくりの各段階 (1. 指導計画の立案、2. 必要な教材・教具の準備、3. 指導の実施、4. 評価と反省) において、教師が協同で進めることが大切
- 各段階で、教師同士が授業に対する十分な共通理解を図ることが必要
- 【TTで共通理解する内容】
 - ① 子どもの個別目標
 - ② 授業展開
 - ③ 役割分担
 - ④ 展開や活動内容、個別目標を考えたTTの指導・支援内容の確認
 - ⑤ 評価 (児童生徒の姿、教師の手立て) 効果的な指導にするには、

[4] 演習

- 2名以上3名以下で教科情報におけるTTの模擬授業を行ってみる
- 単元はどこでもよいが、指導案をきちんと作成すること

[5] 課題

1. 教員1人におけるアクティブラーニングのメリット/デメリットを考えよ
2. TTにおけるアクティブラーニングのメリット/デメリットを考えよ
3. 教員の立場からしてBOYDについてメリット/デメリット
4. TTについての必要性和現状

提出：sho-ooi@fc.ritsumei.ac.jp もしくは Google Form

メールの件名「O1 情報科教育法 b_学番-名前」

締め切り：授業の前々日まで（工学部：10/16、情報科学部：10/9）